

『多文化・共生コミュニケーション論叢』創刊にあたって

「狂戦士殺しのバーディー」「けつねコロッケのお銀」「中辛のサブ」「カミソリ後藤」といった名の付け方を「二つ名」と言う。2004年度に開設された我われフェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科が置く学内学会、およびこの学会が編集・発行する研究誌に冠せられた名は、「多文化・共生コミュニケーション」。何やら「二つ名」どころか「三つ名」のようですらある。

2002年、それまで英文学科および日本文学科の2学科制であった文学部に、情報、文化、心理、社会、言語などの人文・社会諸科学をインテグレートしたコミュニケーション系の学科を新規開設する構想がスタート、宮坂覺文学部長のもとで設置委員会が発足した。その頃我われは、新学科名を、「多文化・共生コミュニケーション学科」にしたいと考え、その名称で文部科学省に申請するつもりでいた。当時も今も、どの大学も付けていない先進的な学科名である。

1999年度からスタートした、文学部の英文・日文の両学科にまたがる領域に配置された「コミュニケーション科目群」と、両学科生が履修し卒業論文をまとめる「コミュニケーションゼミ」は、学生たちから好評のうちに数年が経過していた。両学科科目からくり出され、また新たに設けられたコミュニケーション系のカリキュラムが、実はジェンダーや異文化、高齢者、障がい者、方言、文化人類学などのマルチカルチャリズムを内包する先駆的な科目構成となっており、またそれらをつらぬくコンセプトが、多様な人びとと共に生きる「共生のコミュニケーション」であった。

一方で、21世紀に入ってから人間社会は文化的・宗教的な諍いが絶えず、9・11以降に象徴されるように単独主義を採りながらその単独主義こそがグローバリゼーションであると考え・行動する米国や、過去の加害行為について忘却し歴史を修正するような日本のナショナリズム傾向の現状がある。そのような憂慮すべき状況に対して、ハイブリッド化しディアスポラ化する人間や文化を肯定的にとらえる新たな視座、国家や民族や言語や人種やジェンダーをも相対化するクリティカルな視座、そして少数の他者に耳を傾け、主張することはきちんと主張し、確かなリテラシーに裏打ちされたメディア利用と情報利用の力が必要だと、我われは痛感していた。

そこでキーワードになったのが、カナダやニュージーランド、オーストラリア等に代表される多文化社会、そしてコミュニケーション科目群のコンセプトであった共生のコミュニケーション、さらに表現とメディア利用についてのリテラシーとスキルによるメディア表現によるコミュニケーション、の3つなのであった。

かくして、「二つ名」というべきか「三つ名」というべきか、多文化・共生コミュニケー

ション学科という長い名称が設置委員会で提案され、学部教授会や全学的な委員会でもおかたの了承を得るところとなったのである。

カリキュラムは、文学部全体のカリキュラム改革と並行して構造化され、入門期ゼミとして学部共通の「R&R(Reserch&Report)」（前期科目）と「コミュニケーション基礎ゼミ」（後期）が必修科目として設けられ、その下に入門編として「全体像を学ぶ」と「コミュニケーションの基礎を学ぶ」という科目群、研究スキルを身につけるための「研究方法に取り組む」という科目群が配置された。「多文化理解」「共生コミュニケーション」「表現とメディア」の3領域の専門科目群は、それぞれ、座学を中心とした「理論を学ぶ」と実習や現場体験を重視する「フィールドへ出る」というくくりによって差異化が払われた。また「現代文化を読み解く」という科目群と新しく設けられた文学部共通科目の「文学・文化理論を学ぶ」というポスト・モダン系の科目群も置かれ、多層的なカリキュラムの構造は、この学科のコンセプトをよくあらわしていると自負している。

学科の構想とともに、呼び集められた専任教員は全員で9名。他学科のように「英文学者」「日本文学研究者」といったひとくくりできる研究者たちではなく、教員構成は学科の「二つ名」を反映して、やはりハイブリッドな人事となった。英文学科から異文化心理の教員が1名、日本文学科から社会言語学、現代文化学の教員が2名、文学部所管の教職等から全員、すなわち社会心理学、教育史学、体育学、キリスト教学の教員4名がそれぞれ移籍し、そして新たに多文化社会論、情報学の2名の教員を迎えてスタートすることになった。非常勤講師陣も、慶応や立命館や一橋といった他大学の一流の研究者たちのみならず、新聞社、映像制作プロダクションや地方公共団体等に勤める現場の人、評論家、弁護士、フリーランスのコーディネーターなどを迎えることができ、贅沢な陣容となった。

残念ながら、多文化・共生コミュニケーション学科という学科名称は、申請直前になって諸般の事情で変更することとなった。多文化社会という視座は欧米のポスト・キリスト教の近代思想から派生したものと見えようし、実際に多文化主義を宣言している国はキリスト教国が多い。また、学科は「イズム(主義)」として多文化を宣言しているわけでもない。しかし、多文化という多面的・相対的な考え方が、キリスト教のエートスである一神教と相容れないという指摘がなされ、結果として学科名は「コミュニケーション学科」というオーソドックスなものに落ち着くことになった。

さて、2004年度に1期生を迎えたコミュニケーション学科は、開設当初から多様な学生たちが入学、幸いにして受験生数も年々順調に伸びている。在学生たちは多文化理解、共生コミュニケーション、表現とメディアの3領域と、それをつらぬく理論と調査スキルの習得を通じて勉学・研究に励み、かつ学生生活を楽しんでおり、新たな伝統がつけられつつある。

この、コミュニケーション学科の全学生と専任教員・副手とで構成される学術・研究団体の名は、冒頭に述べたように「多文化・共生コミュニケーション学会」である。流れた子の名を我われはここに再び付けることを行った。「二つ名」の復活である。本学会は、1期生入学時から設立され、学生幹事が中心になって春に総会および新入生歓迎イベント、秋に見学会・研修、学会ニュースの編集・発行などの諸事業を行っている。

ここに創刊する『多文化・共生コミュニケーション学論叢』もその活動の一環であり、学会の研究誌としての性格を有している。本来は学会設立年次の創刊を予定していたにもかかわらず、我われ教員たちの予想外の忙しさ、初代主任の怠惰もあって論文の執筆や刊行の準備ができないまま日時が経過してしまった点は残念であるが、完成年度とともに大学院の専攻も設置する予定であり、そうなれば、教育・研究機関として、日本や世界に対し多文化・共生コミュニケーションへの学術的・実践的貢献がさらに可能となるだろう。

今後本誌が、教員および学生の研究発表の場として活用され、学術媒体として内外に定評あるものに育つことを願っている。

2006年2月

フェリス女学院大学多文化・共生コミュニケーション学会会長
諸橋泰樹